

それとしもまだ立あへぬ秋風に
尾花がもとや先づ暮ぬらん
某年十月十四日、家慈御夢得の句。

惣代
征易

日の光山の岸根の額かな
同月廿一日禮幹夢想。

年の花松にもさけよ藤の門
癸巳の二月十五日。
正徳三年

壽は千世のためしものなれば八百萬代と歌ふなりけり
十一月廿一日夜夢得。

光さす山はもみぢの色まして
家兄兼山君續成。

松に音する千々の秋風
同月廿七日夜夢得の句。

俱興快矣哉。興快兩人哉。余讀兄弟宴聖善、俱快矣哉。
右反古中に有て爰に寫置ぬ。

一、ながさきけんゆうの消息文
そむしよかたじけなく、ちようだいいたし候。まことにそ
の御くにまかりのぼるいらい、たしかなるびんぶうをえさ

るによつて、ぐさつをさぐる事これなくまかり過候。し
んぐわい申ばかりなくぞんじ候。しかれば御こんしよはい
けん、まことに御ぜんにしようつかまつるおもひな
し、なみだは袖のふちとなり、思ひはふじ、あさまにくら
ぶる程に、おぼえ申御事に候。このとし月、ひでよしこう
につかへ、四こくさいこくのつかひとして、ある時はふね
にうかび、ふうはにまかせ、又ある時は山路のいはまくら
のべのくさしくとこ、おきふしなるうさつらさのうち
も、のりの御すゝめのありがたさにたえず、ゆめのうち、
うつゝのそらにも、たごせの事のみねがはしくぞんじ
候。ことにこの秋ひでよしこう、ほつこく御どうざと候へ
ば、その御くにさわがしく、御身のおき所、さこそとぞん
するばかり、こゝろはこし地のあらち山のあらしの風、な
がはまのいそべのなみたちぬにも、君がすみかのしづ心な
き事をのみ、なげかはしくぞんじ候。おほせのごとく、い
のちのうちに御めにかゝり、たごしかたゆくすゑのあり
さま、申つきたさねんぐわんまで、ぞんじたてまつり候。
いかならん野のすゑ山のおく、しかすむたにのそこにも御

身をかくし、御いのちつゝがなきやうに御ざ候はゞ、又の
としの春の頃は、とこ世にかへるあまつ雁をともし、と
な見山のせきもり、いみづ川のふなおさになりとも、君が
御すみ所たづね申べきとぞんじ候。ことに三首の御詠歌、
いづれもあはれふかく、心ゆうに、しゆしようごんごにた
え申候。きのふけふのやうに存じ候へども、はや二十ねん
よに罷り過候。

手を折てあひみぬ年を數れば十といひつゝ二つすぎけり
小車の廻りあうてふよの習ひうちこそたのめ君とわが中
老鶴のちとせふるてふ物なれば六十むとせはまだ幼なし
御詠かたじけなくぞんじ、おろかなる心にかくのごとくつ
らね申御事に候。中々心中にぞんじ候程は、申つくしがた
きあひだ、まづ筆をさしおきたてまつり候。

八月四日

ながさきけんゆう

まろ山いよ殿

なほくそんばくさま御のぼりなされ、御たづねなされ候
へ共、折ふし四こくへまかりむかひ、じんちゆうの事にて候
あひだ、そうおうの御ほうこう申さず、ほんいをうしなひ

そんじ候。御うへさま、しよようにとのさま、そのほか御こさ
またち、何事御ざなく候よし、ちんちように存じ候。さて
はゑんわしさま、御わうじやうの事、ことばなきしだいに
候。たれとても、のがれざるみちとは申ながら、さてく
ほいなくぞんじ候。さながらあるはなく、なきは數そふの
ふること思ひ出られ、あはれふかくとゞめ申候。近藤老人の家に
此反故あり。う
つして此巻に入る。丸山伊豫
長崎けんゆう追て可也。

一、扣減の典故

扣減、非扣減月糧則照下暗補。見皇明通紀嘉靖十三年

一、稻葉正能變死の真相

稻葉伊勢守正能、明暦元年九月駿河在番の所、翌年七月夜
中變死之事。委細前巻に
記しぬ。家従不殘江戶にて、稻葉美濃守正則第
にて吟味有之候。正能の親類縁者不殘參會、人別糺斷有之
處、家老安藤甚五左衛門第一に亂心にて自殺と申、皆同じ
筋のみに申て一定亂心の方に成ける。時に七箇日を限りの
寄合にて、正則申されけるは、此列座當家・他家・親類・縁者
打寄り數日吟味候へども、不知事は是非もなし。相談は今
日を限りにいたし、知不申に付ては其趣言上可申と被申候